

『狭衣物語』の引歌

—— 平安時代における流布万葉集について ——

井 海 マ リ 子

『狭衣物語』が源氏色を最も濃厚に表わしている作品であるといわれるのは、非常にこの物語が和歌的であるということにもよる。

作中歌だけでも二〇八首あり、地の文中にも引言が多くみられる。引歌の中で、万葉集からの引歌とされているものは『日本古典文学大系』にあげられているものだけでも十六首ある。しかし、はたして『狭衣物語』の作者が万葉集諸本から引歌したのかという疑問が生じてくる。平安時代における作者が万葉集をどのように受け取り、それに影響されたかという問題が起きてくるのである。そこで『狭衣物語』の作者が万葉集からの十六首の引歌をどのような本文から引いたのかという考察を試みることにする。

ところで万葉集最後の歌人、大伴家持が死去したのは桓武天皇の延暦四年である。古今集が成立したのは延喜五年である。この間の約百二十年は万葉集的和風が次第に稀薄となり、古今集の歌風が表われ始めた過渡期である。延喜年代が過ぎると天暦年代の後撰集の

時代となる。この時代に万葉集に古点が施された。ということは、既に万葉集が難解なものになったことを示すとともに、この当時の歌人が、万葉集を再確認したことを示している。まして『狭衣物語』の成立したと推定される頃は平安時代末期であり万葉集の理解はいっそう複雑化して来ているのである。

しかも『狭衣物語』は物語中これ程多くの異本群を持つ作品は『任吉物語』を除いて他にはないと言われている。三谷栄一氏はこの異本群を整理し、四系統に分類された。今日ではほぼこの四系統分類が定説となっている。このうち、全巻揃って第一類に属する伝本は内閣文庫本のみである。故にこれを底本とした『日本古典文学大系』を使用する。

最初、引言を『日本古典文学大系』からあげ、その引歌について個々に考察する。「」の中は引言、その下の（）は『日本古典文学大系』の頁数、次の列からの「——」は本文である。

(1) 「入りぬる磯の」(三四頁)

「……鳥の音つらき暁の別に消えかへり、入りぬる磯の嘆きを……。」

本文中のこの引言は、狭衣を恠い慕っている女性の想いを表現しているものである。従って内容的に最も適当な引歌としては『万葉集巻七 譬喻歌』の「潮みては入りぬる磯の草なれや見らく少く恋ふらくの多き」を挙げることが出来る。逢瀬少なく、恋しく思うことばかり多いのを嘆き、つらく思っている女性の心理が、表出されていて、『狭衣物語』の意味内容と一致する。

この引歌を指摘しているのは『日本古典文学大系』のみではなく、『狭衣下紐』『日本古典全書』にも見えている。この歌が所収されている書物は三十種類以上もある。この中で問題のある「入りぬる磯」に異同文字は見当らない。

ところで、「入りぬる磯の」という歌は『千五百番歌合』では「潮みては隠るる磯の磯馴松此もみる日ぞ少かりける」とあり、『歌林良材』では「みるめこそ入りぬる磯の草ならめ神さへ浪の下にくちぬる 讃岐」とある。これらは成立年代も『狭衣物語』成立以後であり核当歌というよりも類似の歌と思われる。

「入りぬる磯の」という語句は多くの書物に引かれている。物語では、『源氏物語』『夜半の寝覚』『いほぬし』等に見られる。歌論書や歌集に引かれているだけでも三十数種類の書物名があげられる。(古文獻所収『万葉和歌索引』による。)『狭衣物語』の成立年代は明らかではないが、三谷栄一氏の説(ほゞ延久・承保年間、白河初期)によると『狭衣物語』以前にこの語句の所収されていた

ものは『歌経標式』『新撰和歌』『古今和歌六帖』『拾遺抄』等がある。ということは、歌に対する知識人の作者が、この歌を知っているのは常識であったと言わねばならない。まして、『狭衣物語』の作者が、最も手本としていたであろうところの『源氏物語』の中に見られるのであるから、これから引言としたのではないかと考えられるのである。「入りぬる磯の」の引歌は『狭衣物語』成立以後の書物にも『万葉集』の歌として多く所収されている。従って平安時代から室町時代にかけて一般に知識人の間でよく使用されたものとみられる。

(2) 「菓摘みには、野をなつかしむ」(三五頁)

。「まして菓摘みには、野をなつかしむ、旅寝し給ふあたりもあるべし。」

この引歌として次の歌があげられる。

「春の野に菓つみにと来し我ぞ野をなつかしむ一夜寝にける」
(万葉集巻八)

この歌は『古今和歌六帖』『続古今和歌集春下山辺赤人』『赤人集』『和歌一葉抄』などにも所収されている。しかもこれらに所収されているこの歌は、異同文字がほとんど見られない。故に『万葉集』原本から『和歌一葉抄』に至るまでに流布された間、あまり異例は見られなかったと考えられる。従って『狭衣物語』の作者は、この引歌を『万葉集』諸本から引いたのであっても、『古今和歌六帖』から引いたのであっても、同内容が表現されているということになる。

本文の内容を見ると、ここは狭衣が「いなか娘に心引かれて、出先で仮寝をなさる相手もあるはずである。」(日本古典文学大系頭註二〇)という表現にこの引歌を使用しているのである。この三谷栄一氏の注釈によると、女性を蓮に譬えたことになる。また本文の「旅寝し給ふあたりもあるべし」という表現からするとこの注釈は妥当である。ところで『万葉集』のこの歌の注釈で鴻巣盛廣氏は「作者が蓮咲く野のなつかしさに、そこを立ち去りかねて、そのまま自然の懷に抱擁せられて、一夜を眼ることを喜んだ」ものであって、女性を蓮に譬えた譬喩歌とは思われぬとしている。自然詩人としての赤人の心境を考えた場合、又『万葉集』の歌の直情的であることを考慮した場合、この解釈は当然妥当であると言わざるを得ない。そこで考えられるのは『狭衣物語』の作者が、この『万葉集』の歌を譬喩歌として解釈し、それを引いたものか、あるいは平安時代末にこの『万葉集』の歌を譬喩歌として扱っていたかのどちらからであるということである。おそらく後者ではなからうかと推測される。

(3)〔岩垣沼〕(四〇頁)

「思ひつゝいはがき沼の菖蒲草みごもりながら朽ちやはてなん」

この引言は、狭衣が姫宮に宛てた歌に取られている。「岩垣沼」という語句の使われた歌は三首程あげられる。

- ①「青山の岩垣沼の水隠りに恋ひや渡らむ逢ふよしを無み」(万葉集 卷十一)

『狭衣物語』の引歌 (井海)

- ②「玉かぎる岩垣淵の隠りには伏して死ぬとも汝が名は告らじ」(万葉集 卷十一)

- ③「かけろふの岩かきぬまのかくれにはふしてしぬともなかなはいはし」(古今和歌六帖)

①の歌意は「私ハ恋シイ人に逢フ方法ガナイノデ(青山之石垣沼間乃水) 隠レ忍ンデ、心ノ内デ恋シク思ッテ日ヲ送ルコトデアロウカ。困ッタモノダ。」(『万葉集全釈』)というのであって、狭衣が恋しく思った姫宮に「岩垣沼の菖蒲が水の中に隠れこもったまま人知れず朽果てるように、私の恋も恋ひ慕いながら、その思いを言うことができず、心に秘めて死んでしまうのでしょうか。」(三谷栄一氏訳)という歌を贈ったその内容とは合致するものである。②は「汝が名は告らじ」とあるから意味上から『狭衣物語』の歌と合致しない。ここは、やはり①が適当である。①の歌を引歌として指摘しているのは『日本古典文学大系』の他に『古典全書』が『拾遺集』から引いている。『狭衣下紐』にはこの引歌は載っていない。

この歌は『古今和歌六帖』『拾遺和歌集』『綺語抄』『和歌童蒙抄』『五代集歌枕』『和歌色葉集』『夫木和歌抄』『和歌一葉抄』等に所収されている。これらを校合した結果『狭衣物語』に引かれた「岩垣沼」と「みごもり」との語句の異同はみられない。と、いうことは、『万葉集』原本の時代から『狭衣物語』を経過してゆく間に、歌の内容はさほど変化はしなかったと考えられる。

- (4)〔白玉の瑕〕(五九頁)
- 「『さしも白玉の瑕までは見えざりしかど、鼻高は、いとよく

言ひ当て給へり」

本文中の「白玉」は美人を譬えているのであるが、引歌は見当らな
い。語句としては、『万葉集 巻五』の長歌「……わが中の生れ出
でたる白玉のわが子古日は……」にあることを三谷栄一氏は参考と
して『日本古典文学大系』の中にあけてみえる。しかし、この場合
の「白玉」は愛児を意味するものであって、まったく内容の異った
ものである。また「玉に瑕」という語句は『源氏物語手習巻』に
「玉に瑕あらん心地し待れ」とある。『狭衣物語』の作者はこの
『源氏物語』の中から引いたのではないかと考える。

(5) 「吉野川・妹背山」 (八九頁)

「吉野川何かは渡る妹背山人だのめなる名のみ流れて」

この本文は狭衣が今姫に兄妹らしい情を示してくれないのを恨んだ
母代の歌である。

ここで問題となるのは吉野川と妹背山の関係である。これらの名
の挿入された歌をあけてみると、

① 「大名持少名み神の作らしし妹背の山を見らくしよしも」 (万
葉集 巻七)

② 「流れては妹背の山の中に落つる吉野の川のよしや世の中」 (古
今集 恋五)

③ 「人ならば母がまなごそあさもよし紀の川のへの妹と背の山」
(万葉集 巻七)

④ 「君とわれいもせの山も秋くれば色かはりぬるものにそありけ
る」 (河海抄)

⑤ 「背の山にたゝむかへるいもの山ことゆるすかもうちはしわ
たす」 (万葉集 巻七)

などがあげられる。

この中で②の歌には「妹背の山の中に落つる吉野の川」とあり、
③では「紀の川のへの妹と背の山」となっている。ところで「妹背
山」や「紀の川」・「吉野川」の地理的考証はしばしば問題となっ
ているのである。

本居宣長は『玉勝間』で「妹山」を考証して、ただ背の山という
名についての詞のあやであって実際にはそのような山はないとして
いる。

しかし、鴻巣盛廣氏は⑤の歌の注釈で「この歌によればともかく
も妹山と言われた山があったことは確かであるが云々……。」とさ
れ、『紀伊国名所図絵』の「妹山は浪田村にあり今長者屋敷とい
ふ。妹山は青山村にあり、今針伏山といふ。紀の川を隔てて相對せ
り。或説に大和国に妹妹山ありといふ甚誤なり。」を引いて参考と
されている。

三谷栄一氏は『日本古典文学大系狭衣物語』の注釈で「『吉野
川』は、大和国(奈良県)吉野郡を西流し、上市・下市・五条等を
経て、紀伊国(和歌山県)界真土(まづち)山を経て更に西流し、
和歌山市の西北に至り海に入る。「妹背山」は、吉野川を狭んで相
対する丘陵。北峰を茂山(もやま)という。これが妹(いも)山で
ある。『延喜式』に名神大社としてある大名持神社を祀る。」とあ
り、その他に吉野川の下流、すなわち紀伊の国に入って「紀の川」
となったところにもあるとしているが、鴻巣氏は⑤の歌によって

「妹背山を吉野川のほとりに求め宮瀧と上市との間に妹背山なる名勝を作つてゐるのは笑ふべきである。」としている。

『狭衣物語』には「吉野の瀧」（一七一頁）とか「吉野河の渡り船を」（二〇八頁）などと「吉野」という地名を使っている。特に二〇八頁の場合の「吉野河」は、狭衣が紀伊国の高野山を経て、粉河寺に参る時のことであるから三谷栄一氏が指摘されるように「紀の河」のことを上流の「吉野川」の名で呼んでいるのである。また②の歌の妹背山は「紀の川」の妹背山といわれている。従つて、これらのことから考えると、狭衣の歌の「吉野川」というのも実は「紀の川」を上流の名で呼んだものであつて、「妹背山」というのは紀の国の「妹背山」であると考えられる。

『河海抄』を見ると、「頭中将玉かつらを日來は兄弟ともしらで恋しつるにいまはあらはれぬればふみまとふといふ與」として『源氏物語』の解釈をし、その後に『後撰集』「君とわれいもせの山も秋くれば色かはりぬるものにそありける」をあげている。そのさらに後に「いもせ山とは紀伊国にいもせの山とて吉野川をへたてゝたゞにむかへる二の山あり」という注釈があり、⑤の歌をあげている。つまり『河海抄』では、はっきり、紀伊国の妹の山と背の山の間を吉野川が流れているとし、しかも当然紀伊国ならば、紀の川と書かねばならぬところを上流の吉野川の名で呼んでいるのである。

ここで引歌はどれが適しているかという疑問が残されてくる。『日本古典文学大系』では、①②③の歌が参考とされている。④の歌も母代の今姫への愛情と見れば、引歌としても良さそうであるが、狭衣への恨みの意味が含まれない。⑤の歌は妹山を今姫、背山を狭

衣に譬えて、狭衣の方が今姫の所へ渡つてきたとも考えられるが、それまでに今姫は狭衣の来訪をこぼんでいたわけではないから合致しない。作者はこれらの語句を含んだものを形を倣えて母代の歌としたのではなからうか。

(6) 「幾夜経と」（一二二頁）

「『幾夜経と』心細ければ……。」

本文では狭衣が飛鳥井女君を失い、悲嘆しているところでの引歌である。引歌としては、

「ぬは玉の夜渡る月を幾夜経とよみつつ妹は我待つらむそ」（万葉集 卷十八）

をあげることができる。

(7) 「尾花がもとの思ひ草」（一一九頁）

「尾花がもとの思ひ草は、なを、よすが」と、思さるゝを、むげに霜枯れ果てぬる。」

本文は、狭衣が飛鳥井姫君のことを心にかけているところである。引歌としては、

① 「道辺の尾花がもとの思ひ草今さらさらに何か思はむ」（万葉集 卷十）

② 「野辺見れば尾花がもとの思ひ草かれゆく冬になりぞしにける」（和泉式部集）

③ 「道のべの尾花がもとの思ひ草今便何の物を思はむ」（古今和歌六帖）

があげられる。

この歌意は「思ひ草の物思いのしげなのを見てそのやうに心配するな、二人の仲は変わらない」（古典全書）となくさめもし、自分の決意も示したものである。地の文にも「なほよすがと思さるるを」とあるから、狭衣の気持とよく合致する。また②の歌の「冬」とあるのは後続文の「むげに霜枯れ果てぬる」と合うのである。従って作者の脳裏にあったのは『古今和歌六帖』と『和泉式部集』の歌であつたと考えられる。

(8) 『雁羽の小野』(一二二頁)

「うちとげ睦び給はんもつゝましくおほされて、雁羽の小野』
になり給へど」

この引歌としては

「御狩する雁羽の小野の機柴の馴れはまさらず恋こそまされ」

(万葉集卷十二)

があげられる。この歌は『和歌一葉集』にも

「御狩するかりはの小野のなら柴のなれはまさらてこひそまされる」

とあり、異同文字としては「まさらず」が「まさらて」になつてゐるだけである。

(9) 『後瀬の山』(一二三〇頁)

「おぼすに、味気なく涙落ちぬべくて、心強く思ひのかるれど、『後瀬の山』も知りがたう、美しき御有様の近まきりに、いかゞ思しなり給けん。」

引歌として、最も的確なものは『万葉集卷四』をあげることができる。

①「かにかくに人は言ふとも若狭道の後瀬の山の後も逢はむ君」

「後瀬の山」という語句は物語の中にも見られる。『枕草子』『夜半の寝覚』『いほぬし』（新校群書類従第十四巻）等に見られることを『古文叢所収万葉和歌索引』の中で指摘されている。しかし『狭衣物語下紐』には「後瀬の山」は何の注釈もほどこされてない。ところで『狭衣物語』の底本には「のちせの山」という語句は見えるのであるが、『古活字本』にはこの語句は見られない。故に『衣狭下紐』は古活字本系統の書物を参照したのではなからうかと考えられる。「後瀬の山」という語句を扱つたものは、この他にも二、三見られる。

②「のちせ山後もあはんと思ふにぞしぬべき物をけふまでもあれ」(五代歌枕)

③「わかさなるのちせの山の後にまたあはんかならずけふならずとも」(河海抄)

ところで本文は狭衣が女二宮と出会つてその女二宮と後の逢瀬も計りがたい気持を「後瀬の山」という語句で表出しているのである。すると本文の意味を含んだ引歌としては③が適当かと思われる。

(10) 『槇の戸』(一二三二頁)

「悔しくもあけてけるかな槇の戸をやすらひにこそあるべかりけれ」

引歌として『万葉集 卷十一』の

「奥山の真木の板戸を押し開きしゑや出で来ね後は何せむ」

があげられる。

山(猪名山ゆすり) (二六四頁)

「人の物言ひは真なりけり」と、思し召して、『猪名山ゆすり』にては取所なきを……。」

『日本古典文学大系』ではこの部分が底本と異本とで大きく異っていることをあげている。そこで『日本古典文学大系』には「猪名山ゆすりにて」としたことの根拠を次の如くに注釈してある。「はじめの部分は『ぬなやま』と『ゐるやま』と二つあるが、『ぬなやま』の方の伝本が多く、『ゐる』と『な』は誤写の相違とみられる。終りの部分は『すりにて』と『さりにて』と『ゆすりにて』とあって『ゆすりにて』が多い。『ぬなやまゆすりにて』と解して引歌を求めると、国歌大観に『ぬなやま』とあるのは一首しかない。」これによつて、「猪名山ゆすり」の引歌は『万葉集 卷十一』の歌があげられるのである。

「しなが鳥猪名山とよに行く水の名のみ縁よさえし こもり妻はも」本文中のこの引言は狭衣が一品宮とのあらぬうわさをたてられたのをこの語から表現しているのである。

ところで、この歌の意味は「居名山ニ音ヲ立テテ流レル水ノヤウニ、評判バカリ高クナツテ、二人ノ関係ヲ世間デ言ヒハヤシタガ、実ハ女ノ父母ガヤカマシク監督シテ家ニトジコメラレテ逢フコトノ出来ナイ彼ノ女ハソノ後ドウナツタデアラウヨ。心配ナコトダヨ。」(万葉集全釈)である。

従つて『狭衣物語』の作者は「実際には何の関係もないのに、うわさばかりが広まった」意味をこの歌から引いているのであり、これを引歌とするのは的確である。しかし、『狭衣下紐』にはこの歌

は引かれていない。

ところで、こゝにまだ一つの問題点が残る。それは「響」の字のよみ方である。現在、『万葉集』では「とよみ」「とよに」等とまれている。しかし『狭衣物語』には「ゆすり」となっていることである。『校本万葉集』によると底本は「とよに」となっており『嘉暦傳承本』と『古葉略類聚鈔』では「とよみ」とある。しかし「ゆすり」という語は『万葉集』諸本にはあらわれていないのである。と、いうことは『狭衣物語』の作者は直接『万葉集』諸本から引歌をしたのではないと言えるのである。

そこで、この歌が載せられている書物を校合してみると次の如くなる。

「とよに」——『校本万葉集底本』 『綺語抄』
「とよみ」——『俊頼髓腦』 『夫木集』 『和歌一葉抄』
「ひひき」——『古今和歌六帖』
「ゆすり」——『猿丸大夫集』

この結果、『狭衣物語』に引かれている『ゆすり』という訓み方は『猿丸大夫集』に見られる。また『俊頼髓腦』 『夫木和歌抄』 『和歌一葉抄』等は『嘉暦傳承本』 『古葉略類聚鈔』の系統からとられたものではないかと考えられるのである。

とにかく、『万葉集』諸本では「とよみ」とか「とよに」とかよまれていたものが『古今和歌六帖』では「ひひき」とよまれ、さらに、『狭衣物語』の時代になってくると「ゆすり」とよまれるように大きく変化してきていることがわかる。『狭衣物語』の作者は、この歌を『万葉集』諸本から引いたのではなく、『猿丸大夫集』か

『狭衣物語』の引歌 (井海)

ら引いたものとする方が的確である。

(2) 『板田の橋』 (三五〇頁)

「『板田の橋』よ。いかにとかや」

本文では、狭衣が困難な中からも女二宮に会いに来たことを表現する引言となっている。従ってこゝでは『万葉集 卷十一』の歌があげられる。

「おはりだの板田の橋のこぼれなば けたよりゆかむなこひそ
わぎも」

これは「かならず会いにゆくから」というのであって、本文の内容と合致する。この歌は『夫木和歌集』『古今和歌六帖』『五代歌枕』等に載せられている。『日本古典文学大系』では『古今和歌六帖』からの引歌としてあるが、的確であろう。

(3) 「細谷川の音さやかに」 (三八一頁)

「細谷川の音さやかに流れて」

この引歌として次の二首があげられる。

① 「大君の三笠の山の帯にせる細谷川の音のさやけさ」 (万葉集 卷七)

② 「まがねふく吉備の中山帯にせる細谷川の音のさやけさ」 (古今集 神あそびの歌 読人知らず)

本文では狭衣が宰相中将母君の山住みを訪い、その家をとりまいて流れる細い谷川の流れる音を「細谷川の音のさやけさ」という引言で表現しているのである。こゝは山深い地を流れる谷川のことをさしているのだから、②の引歌の方が的確であろうと思われる。

(4) 『夜の衣を返し』 (三九三頁)

「夜の衣を返し侘び給ふ夜な夜な、さすがにあやしう思さるれば
片敷きに重ねし衣うちかへし思へば何を恋ふる心ぞ、」

この引歌は『古今和歌集 恋二 小野小町』の歌が的確である。

「いとせめて恋しき時はむは玉の夜の衣を返してぞきる」

こゝは、有明の月のもとで見た姫君が、源氏の宮に似ていたので寢室で着る夜の衣服を裏返して着て、姫に夢の中で会いたいと狭衣が思っているところである。

ところで夜の衣を裏返して着ると、夢の中で思う人に逢えるという俗信があったので、このような歌があるのである。このことは『歌林良材抄』にこの歌をあげて、「右衣を返してぬれは恋しくおもふ人の夢にみゆると云事昔より云伝へたる事也袖返すもおなし事なり」とある。

『万葉集』にも袖をかえすことによって、恋しく思っている人に夢で会えることを詠った歌がみられる。これらは前述の古今集の歌とともに『歌林良材抄』の中に載せられている。ところが『万葉集』ではすべて「袖を反す」となっているが、『古今集』の頃には「衣」に変わっている。この点を『日本古典文学大系』では「変わってはいがるが、しかし同じ信仰が伝承されていたのだ」とされている。

『狭衣物語』では「衣」を引いているのであるから、やはり『万葉集』よりは『古今集』からの影響の方が強かったと考えられるべきである。

(5) 『月草』 (四一〇頁)

「月草に聞いたてまつりし、御心の後めたさなれど」
この引歌として、『日本古典文学大系』では、次の二つの歌をあげている。

①「百に千には言ふとも鴨頭草のうつろふ心我持ためやも」
〔万葉集 卷十一〕

②「いで人はことのみそよき月草のうつし心は色ことにして」
〔古今集 恋四〕

「月草」とは「露草」のことであり、上代は染料として使用された。『日本古典文学大系』では「その花を直接布に移し、また一旦紙に移して乾かし、入用の時、水に浸して移した。」とあり、その意から「移し」の序となったとされている。従って『狭衣物語』の引歌も、狭衣の移り気をさしての表現に使用されているのである。「月草」という語は前述の歌の他にも多くの歌に用いられている。

『狭衣物語』の内容から見ると、ここは、便の君が、「移り気のようにお聞きしていた狭衣の御心」を気がかりにしているのであるから、②の歌意と合致する。

⑩「ちから車」〔四二九頁〕〔四三〇頁〕

「恋草積むべき料にや」と見ゆる力車どもも、」

「七車積むともつきし思ふにも言ふにもあまるわが恋草は」
ここは狭衣の、源氏の宮への恋の心を表現している。この引歌として『万葉集卷四』の歌があげられる。

「恋草を力車に七車積みて恋ふらくわがころから」

『万葉集全釈』には『狭衣物語』の歌はこれを本としたものである

『狭衣物語』の引歌（井海）

としている。この歌は古今六帖にも載せられているが「つみてこぶらく我ころから」が「つみてもあまる我心哉」になっている。『狭衣物語』の歌にも「言ふにもあまる」とあるところからみれば、「古今和歌六帖」の「つみてもあまる」と合致する。また意味の上からみても、放出するほど、積もりつまった激しい愛情を表現するには『古今和歌六帖』の歌が的確であろう。

以上、『日本古典文学大系』において、三谷栄一氏・関根慶子氏があげられた『万葉集』からの引き歌（但し、『拾遺集』等から引かれたと注釈してあっても元の歌が万葉集に載っているものは含めた。）を列挙したところ、十六首あった。これらについて、内容上の問題点及びそれらの歌が所収されている書物の比較検討をしてみたい。ここからこれらの『万葉集』の和歌が「狭衣物語」と同時期頃かどうかのように読まれていたか、または『狭衣物語』の作者は古点の時代の『万葉集』から引歌をしたのか、それとも、次点の時代から引歌したのか等という一連の問題点が考えられるのである。

まず、校合してみた結果、語句が、いちじるしく異なったものがみられた。「猪名山ゆすり」という語が、時代とともに変化していることをみる時、やはり、『狭衣物語』の成立年代と近い時代の書物から影響を受けている。もし、『狭衣物語』の作者が⑩の引歌として『万葉集』諸本から引いたとすれば、「とよに」か「とよみ」と書かれていたであろう。『狭衣物語』にいかにも異本群が多くあろうとも「とよに」と「ゆすり」はあまりにも違い過ぎていた。それに加えて、『狭衣物語』の成立と近い時代の『猿丸大夫集』の中に「ゆすり」とみられるのであるから、ここは『万葉集』から直接に

引かれたのではない。

また「夜の衣を返す」と「袖を返す」のように、同じ信仰があっても、時代によってはまるで表現の方法が変わってくるのである。

ここでも『狭衣物語』は『万葉集』から引いたのではなく、『古今集』から引いたのである。

『万葉集』から引かれた歌というのを見てみると、ほとんどが歌人、あるいは文人から賞賛をうけている歌である。また歌そのものでなく、ある一部の語のみが、使われていることも多い。だから、『万葉集』諸本の他にも、あらゆる書物の中で見られるのである。

こういうことを考えると、歌にくわしい作者は、あらゆる書物の中でこれらの語句や歌に触れる機会も多いのである。まして前述の如くに、語句の変化や風習の変化などを見る時、明確にそれらの事情が把握されるのである。

(2)の歌のように、その作者や時代によって観点が大きく異なってくるということも、見逃がしてはならぬことである。なぜならば、『万葉集』の歌では直情的に歌われていたものが、平安時代に入ってから『古今集』的な観点からながめると、譬喩歌とされることもあるからである。そこで『狭衣物語』の作者が、どのような観点から引歌としているかを考える時、やはり自ら生きている時代の観方を取るのが当然であり、必然的であると言えよう。

このように考えると⑩の引歌も『古今和歌六帖』から引いたと考える方が妥当に思われる。「積みて恋ふらくわがころから」とさりと歌うよりも「つみてもあまる我心哉」の方が、苦しい恋心を積み重ねてきた思いがより切実に表現されるのではなからうか。

このことは、(7)の歌についても考えられることである。それは『狭衣物語』の成立年代と近い時代の作品と呼応しているところもあるのである。前述したように⑩の歌の「冬」とあるものと『狭衣物語』の地の文にみえる「むげに霜枯れ果てぬる」は互いに呼応していると考えられる。もし作者が①から引いたとするならば、「冬」という季節感は想像からとしか考えることができない。やはり作者の脳裏には「枯れ果ててゆくような飛鳥井姫君の身の上を脳裏に描いていたのだから、②を引歌とすべきであろう。

十六首の引歌のうち、『万葉集』諸本以外の書物の中で適確な引歌となるべきものがない場合もある。(6)(8)(10)がそれである。これはやはり『万葉集』から直接に引かれたものであるうか、あるいは、『万葉集』の時代から『狭衣物語』成立当時まで、異同文字もなく、そのままのよみ方で伝わったか、『狭衣物語』成立年代に存していた他の書物から引かれたのかということも考えられる。しかし風習、語句の変化、時代の異なりとともに変化する観点などの点から考えると、当然、『狭衣物語』に引かれている語句や歌は『万葉集』からの引言や引歌ではないと言える。従って、『万葉集』以外の書物に適確な引歌が見あたらないものでも、現在、散逸した、当時の書物に所収されていたものか、または前述の後者によるものと考えられる。

こうして一連の問題点を考えている時、この物語が、非常に平安時代色の濃厚な作品であり、作者の物の考え方、見方といったものも、決して『万葉集』的なものではなかったといえるのである。この点においても同時代の『源氏物語』と相似するところがあるといえよう。